

# 人は他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのか： 語りの分析からみる「自己と他者」

坂上 ちおり<sup>1)</sup>, 片岡 祥<sup>1)</sup>, 園田 直子<sup>2)</sup>, 津田 彰<sup>2)</sup>

## 要 約

本研究では、人は他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのかという問題意識のもと、「自分についての語り」と「他者との関係についての語り」を同時に分析する。「自分についての語り」と「他者との関係についての語り」が同時に語られる現象を整理し語りに類型を見出すことと、「自己と他者」についての示唆を得ることを目的とする。坂上（2004）研究の「自分についての語り」の協力者のうち、「他者（ここでは親）についての語り」がみられた4名と、新たに協力を得た1名の合計5名の語りを分析対象とした。グラウンデッド・セオリーの考え方に基づいて分析を進め、【契機】と【変化】がカテゴリーとして抽出された。前者については「自分のライフイベント経験」, 「自分の変化」, 「親の変化」の3つの概念, 後者については「親への理解」, 「親との関係」, 「自分」の3概念が抽出された。これらの概念の用いられ方の違いを整理したところ, A. 「自分のライフイベント経験」を契機として, 「親への理解」を変化として語る形式, B. 「自分の変化」を契機とし, 「親への理解」と「親との関係」の変化を語る形式, C. 「親の変化」を契機とし, 「親への理解」と「親との関係」と「自分」の変化を語る形式の3つの類型が明らかになった。「自己と他者」について考察を加えたところ, 「自己から他者」の時系列的な位置づけ, 「自己から他者へ」という組織化, そして「自己と他者」の相補性が示唆された。

キーワード：自己と他者, 語り, 類型, 組織化と相補性

## 問題と目的

自分について語る時、人は自身の様々な体験を想起する。人は他者とのやり取りのなかで生きている以上、この想起される体験に他者が含まれるのは当然であろう。

これまで、坂上（2004）、坂上・園田・津田（2006）、坂上・園田・津田（投稿中）の研究においては、語りから「自分のとらえ方」や「親との関係のとらえ方」について検討を重ねてきた。これらの研究においては、「自分についての語り」と「他者との関係についての語り」をそれぞれに検討するにとどまっている。そこ

で、本研究では「自分についての語り」と「他者との関係についての語り」を同時に検討する。自分について語る時他者はどのように語られるだろうか。そして、他者との関係について語る時自分はどのように語られるだろうか。また、自分と他者とはどのような位置づけで語られるのであろうか。これらのリサーチクエスションのもと「自分についての語り」と「親との関係についての語り」の現象の整理を行なうことを目的とする。そして、「人は他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのか」という「自己と他者」についての議論につなげたいと考える。

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部

## 1. 「自己と他者」についての理論

「自己と他者」に関して、心理学の理論ではどのように説明してきたのだろうか。ここでは自己の理論、アタッチメント理論を取り上げる。

自己や自我に関して社会学や心理学において多くの議論が行なわれてきた。そのなかでも Mead (1934) は、自我の成り立ちについて「社会的経験や活動の過程で生じるもの」であり、「他人の態度を採用できるようになり、他人たちが行為するように自分自身に向けて行為するようになるにつれて、かれは自我になる」と説明する。そして、自我について主体的な側面を「I」、他者の態度を採用した側面を「me」として、その循環的な組織化の様相を「『I』は、『me』を引き出し、『me』にも反応する」と説明している。また、榎本 (1987) は自己概念の規定について「まず先に関係のネットワークで構成された場があり、そこに相手を定位し、それによって初めて自己規定が可能になる」と説明する。

Mead (1934) の考え方によれば、「I」と「me」とが循環的に自我を組織化しているということであろう。また、榎本 (1987) の考え方は、他者との関係をとらえることが先行して自分をとらえるということであろう。

この議論は、発達の視点から考えるならばアタッチメント理論で言われる Internal Working Model (以下、IWMと略) の概念に近いと考える。IWMとは、主要な愛着対象（一般的には母親など、発達の早期に関わりの深い家族）との間で経験された相互作用を基にして形成されるもので、自分自身についてと愛着対象や周りの世界についての心的な表象モデルのことである (Bowlby, 1969/1976, 1973/1977)。さらに Bowlby (1973/1977) は、IWMとは自己についての表象モデルと他者（愛着対象や周りの一般的な世界）についての表象モデルとが相補的に形成されるものであると説明する。つまり、自分が愛着対象や周りの一般的な世界といった他者から受容される存在であるという自己についての主観的な考えと、他者からどのような応答が期待できるかの主観的な考えとは独立ではなく、相補的に形成されるということである。自己と他者についての表象が相補的であるとは、例えば「自分は何か困った時には、誰かに助けを求めろ」という意識には、「自分は困った時にはいつでも、誰かに助けをもらえる価値のある存在である。そして、人（他者）はいつでも助けてくれる存在である」という主観的な確信があるということを示したものである。

## 2. 「自己と他者」についての実証研究

それでは、「自己と他者」について実証的にはどのように明らかにされてきたのだろうか。ここでは、ふたつの実証研究を示す。まず、自己の理論からは Markus (1977) の実験研究、アタッチメント理論からは Bartholomew (1990) の研究結果を示す。

Markus (1977) は、自己について認知的に一般化されたものを自己スキーマと定義し、自己スキーマが自己に関する情報の入力と出力とに影響を与える事を実験によって示している。この実験によると、自分を自立的であるとする人は自立に関する形容詞をより多く選択すること、加えてこれらの傾向のある人は、示されている形容詞が自分に当てはまるかどうかを判断する時間は、自立に関する形容詞の方が短い時間であったこと、またそれらの形容詞に沿った具体的な経験を示す事ができたことなどが明らかにされている。

また、アタッチメント理論を応用して社会心理学者の Bartholomew (1990) は、自己概念について自己と他者への主観的な信頼感の高低の組み合わせによって4つのスタイルで説明することができるのではないかと理論的に考えていた。自己について主観的な信頼感が高い・低いということは「自分は他者から愛されるに値する人である/自分には価値がない」との意識であり、他者について主観的な信頼感が高い・低いということは「他者はいつでも助けてくれるし、関心を持ってくれる/他者は信頼できない、他者は拒否的な存在だ」との意識であることを理論的に示している。そして、これらの理論的な4つのスタイルを実証的に確かめるため、自己への信頼感については依存性の軸、他者への信頼感については他者との親密性の回避の軸を設定し、面接と質問紙を実施している (Bartholomew, & Horowitz, 1991)。これら友人関係におけるパターンについての面接の結果と質問紙での結果との一致を確かめ、Bartholomew (1990) が理論的に提示した4つのスタイルモデルの妥当性を得ている。

Markus (1977) の実験結果から示唆されることは、自己スキーマによって他者との関わりにおける情報の処理の仕方が異なるであろうということである。また、Bartholomewら (1991) の結果からは、自己概念を自己と他者との組み合わせで実証的に検討が可能であるということである。

これらの実証的な研究は、人が自分をどのようにとらえており、また他者をどのようにとらえているのかについての一側面を明らかにすることはできているが、どちらも方法論的な限界があると考えられる。それは、

「人が他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのか」について全体像から検討する視点、そして理論先行でなく現象そのものから検討する視点の欠如である。

### 3. 「自己と他者」についての語りの視点

そこで、本研究では「自己と他者」について語りから検討を行いたいと考えている。それは、語りが「その人の生きている文脈ごと抽出すること（箕浦, 1999）」に適しており、「現場（フィールド）から出発してよりよいモデルを構成すること（やまだ, 1986）」を目指す本研究の立場に一致した素材であると考えられるからである。

また、やまだ（2000）によると「物語としての自己概念」について、自己とは『『個』で定義されず、他者を媒介に生成される、あるいは本質的に他者を抱擁している』としている。また社会構成主義の立場からは、「自己についての語り」とは「他者との関係性によって形成される（Gergen, 2004/1994）」ものであり、関係性の数だけ自己があるとさえ考えられているほどである。それでは、語りに「自己と他者」はどのようにあらわれるだろうか。

### 4. 「自己と他者」についての語りの実証的な研究

近年の自己の語りを取り上げた実証的な研究において、他者や社会を含んだ自己のあり方が示されている（能智, 2000., 岡島, 2006., 中村, 2006.）。

例えば、頭部外傷者の自己物語の再構成を取り上げた能智（2000）研究では5つのカテゴリーのうち「他よりもましな自己」、「プロテストする自己」のふたつのカテゴリーに他者や社会を含んだ自己像が示されている。能智（2000）は、「プロテストする自己」について「自分の直面する困難を社会的不利益としてもっとも意識しやすい」とか、「自分の困難の原因と感じているのは、社会の経済状況や人々の態度である」との説明を加えている。また、多発性硬化症の患者がどのように病気とともにある経験をしているのかについて語りから検討を行った岡島（2006）の研究によると、「病い」経験のあり方について、「自分の変化」と「周囲との関係性」の変化のあり様が同時に語られている事が示された。具体的には、「自分」と「関係性」の

それぞれの変化のあり様によって、①自分は変わらず安定しており、関係性も以前と変わりなく心地のよい距離感であるもの、②自分は膨らむように変わったが、関係性は以前と変わりなく心地のよい距離感であるもの、③自分は縮むように変わり、関係性も以前と比べて不自然になったものという3つの類型が示されている。

これら能智（2000）や岡島（2006）の実証的な語りの研究から言えることは、自己像や自身の意識・経験を語る際には、何らかの形で他者や社会が含まれることが現象としてありそうであることである<sup>(注1)</sup>。

### 5. 本研究の目的

そこで、本研究では「人は他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのか」との問題意識について検討を進めるにあたり、「自分についての語り」と「親との関係についての語り」を同時に取り上げる。「自分についての語り」と「親との関係についての語り」が同時にみられる現象の整理を行ない、語りに類型を見出すことを本研究の目的とする。そして、この分析を通して「人は他者との関係のなかで自分をどのようにとらえているのか」という「自己と他者」の問題についての議論を行なうための示唆を得ることとする。

## 方 法

### 1. 分析に用いた語りのデータ

分析にあたっては、坂上（2004）研究の20名の「自分の変化についての語り」のうち、本研究の目的に沿って他者（ここでは親）が語りに含まれているもの4名の語りを分析対象として取り上げた。ここで、取り上げたものには直接に「親との関係について」語られたものだけでなく、親にまつわるものが語られた場合についても分析対象とした。それは、本研究が仮説生成の方法を取っており、関係について直接に言及されてはいない語りについても分析をすることで、「親との関係についての語り」の現象を明らかにする一助となると考えたからである。

また、これらの4名では十分な仮説が生成できないと考え、本研究の目的に沿って「自分について」と「親との関係について」の調査面接を2004年11月から2006年5月にかけて20代後半の6名に実施した。これ

(注1) このことは、現実の他者の行為のあり方や社会を問題としているのではなく、語り手がどのように他者や社会をとらえているのかということを取り上げている。更に言うならば、他者や社会のとらえ方と自己のとらえかたとの関連性を検討しているといえよう。

ら新たに協力を得た6名のうち、「他者（親）との関係のなかで自分をとらえている」1名の語りのみを分析対象とした。それ以外の5名の語りを分析に用いなかったのは、「検討したい現象やプロセスについて豊かな情報をもたらしてくれる典型例（能智，2004）」ではないと判断したためである。

## 2. 分析対象とした協力者5名

協力者は調査者の直接的な友人・知人あるいはその友人である。事前に調査の趣旨を記した説明書・承諾書を直接あるいは郵送にて渡し協力を依頼し、同意を得られた女性5名、平均年齢は調査時点で27.0歳（26-28歳）である。

## 3. 調査方法

協力者の指定した場所（自宅や喫茶店）や大学内の研究室にて、調査者1名が面接を行なった。全ての協力者について面接の聞き手は同じ調査者である。面接の内容は、坂上（2004）研究の協力者4名と追加協力者1名では理論的サンプリングの点で異なっている。坂上（2004）研究の協力者については、「今まで生きてきた中で、それまでの自分の考えや行動を変えなくてはならなくなった、結果として変わったような時期、出来事やきっかけについてお話しください」とか「自分は変わったと思えますか」、「ご自身にとって、今まで生きてきたなかで一番今の自分に影響を与えていると思われることや、自分にとって意味があると思われることについてお話しください」と教示した。追加協力者については、上記の問いに加えて「親との関係のなかで変わってきたことや、親を強く意識するようになってきたということについてお話しください」と教示した。

一人当たりの面接時間は約60から90分であり、テープレコーダーおよびICレコーダーで録音されたものは面接者自身が逐語録化した。逐語録化されたものの文字数は、9,766文字から23,316文字である。また、

追加の協力者である1名<sup>(注2)</sup>を除いて、他の4名については1回の面接を実施した。

## 4. 分析方法

面接に至る経過や、面接での協力者の印象などのフィールドノーツを記し、面接者自身が録音されたものを逐語録化した。逐語録化されたものから、「自分について」と「親について」が同時に語られている部分について抜き出し、A5サイズ用紙に印字した。「親について」の語りのうち、父親についてと母親について別々に語られた場合には、別の用紙に印字した。そのため、ひとりの語り手が二つの語りの形式を持つこともあった。

Glaser & Strauss (1967/1996) のグラウンデッド・セオリーの考え方に基づいて、5名の語りについて比較検討しながら、これらの語りに共通する概念<sup>(注3)</sup>を見出すこととした。分析の過程では、まずA5用紙に印字された内容について分析することにより、「契機として語られたもの」、「変わったものとして語られたもの…関係の逆転・理解の変化」、「語られる自己の変化」の3つの概念が浮上した。そこで、ひとりひとりの語りを3つの概念ごとに整理し、表にまとめ分析した。この分析が進むと、【契機】と【変化】がカテゴリーとして浮上し、それぞれに3つずつの概念が見出された。【契機】としては、[自分のライフイベント経験]、[自分の変化]、[親の変化]の3つの概念、【変化】としては、[親への理解]、[親との関係]、[自分]の3つの概念が浮上した。更に分析が進むと、契機としての3概念の用いられ方、変化としての3概念の用いられ方の違いのいくつかの形式が明らかになってきた。そこで、この概念の用いられ方を「語りの形式」として、その違いを示す事とした。

妥当性については、第一著者が研究全体の過程で見逃している現象がないかどうかの確認を目的として、データの収集過程・分析過程・仮説生成の過程で研究者間におけるピアディブリーフィング<sup>(注4)</sup>を適宜行なっ

(注2) この協力者については、別の研究目的での集団面接調査を経て、今回の研究目的での個別の面接調査を行っており、面接の趣旨と形態の異なる面接を2回経験している。集団面接調査にて親との関係が語られたため、今回の調査の依頼をしたものであり、分析では集団面接での語りも一部用いている。

(注3) 概念とカテゴリー：原田（2003）に倣い、逐語録から立ち上げられたまとまりを「概念」とし、いくつかの概念間の関係やまとまりを説明する上位の説明概念を【カテゴリー】とする。

(注4) ピアディブリーフィング：質的研究におけるピアディブリーフィングとは、磯村（2004）によると「自分が行なっている研究について、その研究に関わっていないピアに報告し、話し合うこと」とされる。磯村（2004）は、ピアディブリーフィングの目的について、「研究のプロセスを開示することにより、研究者自身が意識的・無意識的に見逃している、研究の手続き、なされた記述・解釈の妥当性を吟味すること」、「研究者自身のバイアスや問題意識を対象化する」ための検証過程であり、「問題設定自体の妥当性を含めた、研究の出発点と方向性の適切さを検討する機会」であると説明している。本研究においては、仮説の生成過程において「語りの形式のモデル図」に示されたものが、実際の語りから読み取れるかどうか、つまり了解性が持てるかどうかについて重点的にピアディブリーフィングを重ねた。

た。また、語り手自身が現象の了解性（能智，2003）や理論の確からしさ（Glaserら1967/1996）を持てるかどうかについて確かめる目的から、協力者1名にピアディブリーフィング<sup>(注5)</sup>を複数回行った。

### 結 果

結果として、【契機】と【変化】をカテゴリとして抽出した。前者については【自分のライフイベント経験】、【自分の変化】、【親の変化】の3つの概念、後者については【親への理解】、【親との関係】、【自分】の3つの概念を抽出した。

カテゴリについては、「変化として何が語られるのか」の内容を示す概念を【変化】として定義した。そして、変化の発端や契機として語られるもので【変化】の3つの概念を引用して語る際に、時系列的に遡って引用する概念を【契機】として定義した。6つの概念の定義や具体的な例については、表1と表2に示した。

これらの6つの概念をどのように組み合わせて語り手は「自分についての語り」・「親との関係についての語り」に用いるか、その引用の仕方を整理したところ以下の3つの形式が明らかになった。この3つの形式

の違いによって類型A・B・Cを抽出した。図1に、3つの形式を比較してモデル図に示した。

- A. 【自分のライフイベント経験】を契機とし、【親への理解】の変化を語る形式
- B. 【自分の変化】を契機とし、【親への理解】と【親との関係】の変化を語る形式
- C. 【親の変化】を契機とし、【親への理解】と【親との関係】と【自分】の変化を語る形式

以下に、実際の語りを引用して3つの類型を示す。なお、語りの引用については、それぞれの概念に該当する部分を下線で示した。下線の表記は以下のとおりである。

ライフイベント      自分・自分の変化      親の変化  
親への理解      親との関係

( ) は、著者による説明の付記である。また、…で囲み引用した部分は、面接者の発言である。

協力者のID番号については、坂上（2004）の協力者のID番号に合致している。新規の協力者については、50番台から表記した。

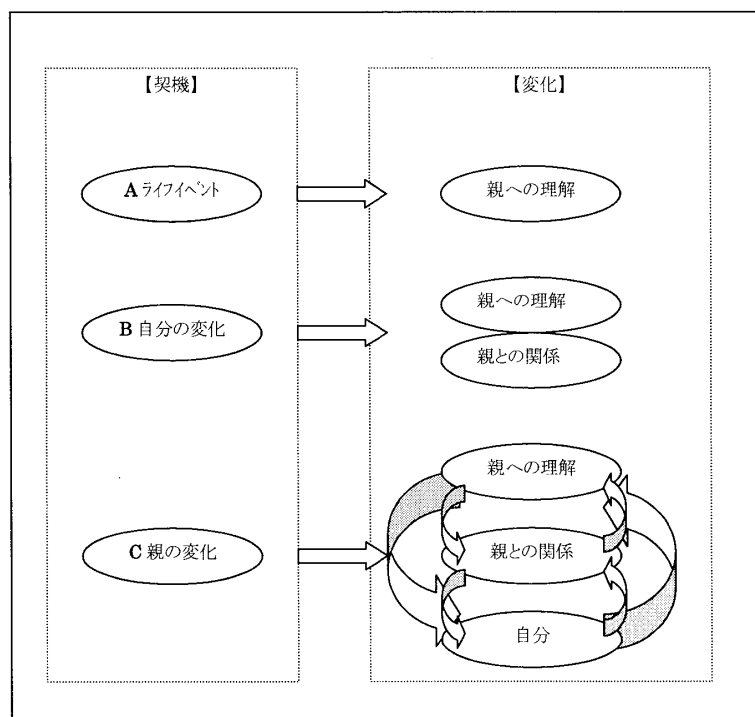


図1 3つの語りの形式のモデル図

(注5) 協力者に対するピアディブリーフィングについて：協力者である語り手に、仮説生成の過程でその仮説を提示し、その仮説について了解性を持てるかどうかについて確かめる方法を Flick (1995/2002) は「コミュニケーションによる妥当化(邦訳：p.277)」と呼んでいる。

表 1 【契機】 カテゴリーの概念の定義

カテゴリー	概念名	概念の定義	例
【契機】	[自分のライフイベント経験]	自身が経験したライフイベントへの言及…学生生活・社会人としての経験・結婚・育児など自身自身が経験したライフイベントを、その後の変化の契機として引用する語り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分が勤めだしてからかな (F8・A)」</li> <li>・「自分が仕事を始めて (F4・A)」</li> </ul>
	[自分の変化]	自己概念や自分についての意識の変化についての語り…ここでの引用は単に自身が経験したライフイベントを引用するに留まらず、この経験を通して変化した意識や自己概念の変化についての語りまた、ここで語られる[自分の変化]は親との関係内で生じたものではなく、関係外で生じたものについての語りである	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分がそれなりに成長、二十歳になって、それなりに成人としての意識がでてきた (F5・B)」</li> <li>・「(ととり) 暮らしをはじめ、それまでいかに無意識に人に頼っていたかということが、すごく実感した (F17・B)」</li> <li>・「(大学生生活を通じて) 考え方に、じぶんなりにひとつの軸をもって考えるところが、すこし出てきた (F52・B)」</li> </ul>
	[親の変化]	親の老化や病気などへの言及…親の体調変化・老化・病気の発症が、その後引き起こされる様々な変化の契機として引用される語り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おばあちゃんの場合には徐々に、こう、悪くなって行って (F8・C)」</li> <li>・「おばも病気になるって (F8・C)」</li> <li>・「父親も母親もそろそろ仕事を引退して (F52・C)」</li> <li>・「(母親が) ちょっと更年期みたいなんです (F52・C)」</li> </ul>

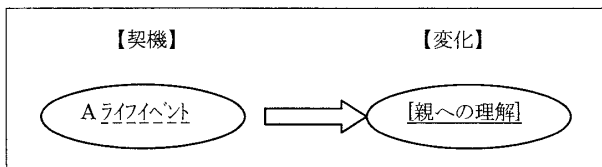
表 2 【変化として語られるもの】 カテゴリーの概念の定義

カテゴリー	概念名	概念の定義	例
【変化】	[親への理解]	親に対しての理解の変化についての語り…過去の親の行動に対する理解の変化の語り、親を 1 人の人として見るようになったとの語り、親への見方が変わったとの語り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「今にして思えば、(その時の母親の行動は) やむを得なかったんだらうなあ (F8・A)」</li> <li>・「(両親も) 苦労じゃなくけど大変な思いをしてきたんだなあ (F4・A)」</li> <li>・「彼ら(親) だって一人の男と女だし (F5・B)」</li> <li>・「親は親なんだけど、1 人の人間として、頑張ってるんだな (F17・B)」</li> <li>・「親とだけじゃなく、それ以外の。その親っていう肩書き以外を感ずますね (F52・B)」</li> <li>・「(親も) そんなに完璧じゃないんだけど、(なんかつ) が、(なんかつ) 感覚をすごいもって (F52・C)」</li> <li>・「(何) でも解るのが親だと思っていた」が、(なんかつ) が、(なんかつ) 感覚をすごいもって (F52・C)」</li> <li>・「(なんかつ) じゃなくて (F5・B)」</li> <li>・「(余計) に関心なくなった (F17・B)」</li> <li>・「(なに) が大変なのかなあみたいな聞き方をしようになった (F52・B)」</li> <li>・「親を自分が守っていかないといけない風になって来たんだな (F8・C)」</li> <li>・「たぶん形容するならば、変らない友達関係、と思うんですけど。友達の質が変わった。ちょっと気をつけておかないといけないなあっていうかんじ。 (F52・C)」</li> <li>・「その人はそういう生き方なんだってしているのは、受け入れられているのができるようなったっていうか。その、人の距離の置き方が (F8・C)」</li> <li>・「今、(更年期) 真っ只中なので、そこで変わっているのが多いかな。考えざるを得ないというか (F52・C)」</li> </ul>
	[親との関係]	親との関係において、実際のやりとりの変化についての語り…現在の親とのやりとりの変化についての語り。親との関係そのものの質の変化についての語り	
	[自分]	自己概念や自分についての意識の変化についての語り…親とのやりとりを通して変化した自己概念や意識の変化についての語り	

**A. [自分のライフイベント経験] を契機とし, [親への理解] の変化を語る形式**

学生生活や社会人としての経験, 結婚, 育児などの自分自身のライフイベントによって, [親への理解] が変わったとの語りである。契機に [自分のライフイベント] を引用し, 変化に [親への理解] を語る形式である。

この形式の語りの特徴としては, 「今になって思えば, 親は……だったんだろうと思う」と, 過去の親の行為についての理解の変化や, 「今は親のことを……だと考えるようになった」との, 現在の「親への理解」が挙げられる。



**F8 (27歳女性 夫と二人暮らし 19歳で母親の突然死, その後祖母の介護・死を経験)**

「今になれば, あお母さんなりに色々こうあったんだろうなあ, っていう。うちのおばあちゃんとの, こう間もあつたらうし。まあこう経済的なこともあつたらうし。」

(中略)

「ただ自分が勤めだしてからかな。働くのが大変とか, ま, 色んな人が子育てしてるの, 友達が子ども生まれてとか。そういうこう, やっぱり生活していくためにはお金がいるとか, そうやって。そういうのが見えてきて, まあ, ああ, それはやむを得なかったんだろうなあ, っていうのが, こう, 今にして思えば。うーん, その私, 自分のことがどうでもいいとかいうのではなくて。っていうのは思えるようになってきたかな, と。」

**F4 (27歳女性 夫と二人暮らし 大学卒業後就職, 結婚を機に退職)**

自分がだから仕事始めて, 苦労して, こうってなった時に。あでも, お父さんとかお母さんも結局, ねえ, 会社に勤めてるわけじゃない。自分たちでこう, っしてしてるわけで。で, お母さん達だっってこうやって, こうやって役所に行ったりして, こうやって突き返されたりとかもしてたよ。とか聞くと, ああやっぱりそうなんだなあって。やっぱ

苦労, 苦労じゃないけど大変な思いしてあれして来たんだなあ, っっていうのが分かるようになってからは, なんか, うん, それから, うん。その, 自分やっぱ仕事始めてから思うようになった。

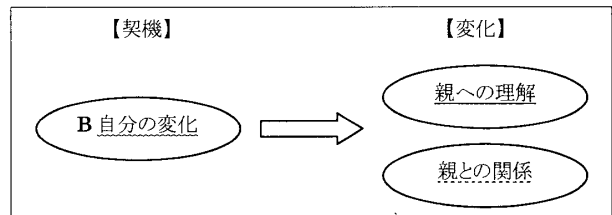
(中略)

大学くらいまでは分からんっっていうか。周りの事が見えてない, 全然, 自分のことしか。でも働き出したら, 分かるのよね。全部分かるようになって, 親の事とかも分かるようになって。

**B. [自分の変化] を契機とし, [親への理解] と [親との関係] の変化を語る形式**

親との関係外で生じた意識の変化や自己概念の変化といった [自分の変化] を契機として, [親への理解] や [親との関係] の変化を語るものである。

この形式の語りの特徴は, 「以前は, 親とは……だったが, 今は……である」と, 実際のやりとりでの [親との関係] の変化を語る点である。



**F5 (27歳女性 大学では心理学専攻 卒業後就職 調査時は妹と二人暮らし)**

まず自分がそれなりに成長, 二十歳になって。それなりに成人としての意識が出てきたっっていうのと, うん, だから親と近くなってきたっっていうことかなあ。うん, そう。なんだろう, 親をひとりの人間として見れるようになってきたのかなあ。…それはどういうふうに見れるようになってきた?…

うーん。やっぱり大学に入ってから, 親の教育義務っていうのが, もう, なんとなく解放された気がして。大学で勉強しろ勉強しろっっていうよりは, うん友達を選べたりとか自分の興味の範囲をね, いろいろしてるほうが強かったから。そのほう。あと心理やりだしたのもあるかもしれない。ね, 勉強し始めて。

(卒論として, 夫婦関係の摩擦が子どもに及ぼす影響を取り上げて, 取組んだ経験について。)

私のたぶん根底としては AAI (親子関係をどのよ

うにとらえているかについての調査面接：Adult Attachment Interview) があって、でも問題としてきちんと起こってこなかったんだけど、卒論のテーマを選ぶときに、なんかそう、そのAAIの話とリンクしたんだよね。で、私はうん、父親のことがやっぱりよく分かってなかったな、というのと、父と母が喧嘩してるのが好きじゃなかったな、っていうのがあって。」

(中略)

「やっぱりインタビュー後かな。人、父、母とそれぞれ1人の人としてみようとしたんだよね。…両親以外は考えられなかったんだけど。彼らだって1人の男と女だし、1人の人間なわけじゃないっていう意識を、あ、今まで持ったことがないなあって、なんとなくそんなとき思ったんだよね。話しながらというか。その後、で、引いて見るようになった」「でもそう、いったん混乱して、それを少しずつ拾い集めて、自分のなかでこう改めて冷静に考えたときに、ああ両親のこと分かってなかったし、両親もそれぞれひとりの人間なんだな、って。父と母である前に、一人の人間なんだなあって思ったのね。そう、それで、すこしづつ、そういえば、まあ母、うん母も父もそれぞれ、ね、親がいて、やっぱりそれぞれ子どもだった時期があって。それぞれの生活環境もやっぱりぜんぜん違ったから。父があれだけこう不安定だったり、対人関係がうまくいかないのは、ああそういう自分、父の幼児体験が、影響しているっていうのもあるんじゃないかなあ、って。自分がやっぱり勉強していくなかで、そういうのをなんか照らし合わせて考えてたんだよね。」

…そういうふうに、お父さんのことを理解できるようになって、F5さん自身はどういうふうに変わった？…

えっと、父に対して？まずけんか腰ではなくなった。もう、なんに対しても父に対しては聞き耳がもたなかったのね。もうなんに対してもお小言だって言うか。ああ口うるさいね、とか細かいなとか。思っていたけど、まあ、言ってることは確かに間違っていないから、それはちゃんと、一応は聞くようになったし。うん、父はこういう言い方しかできないけど、まあ、きっとこういうことが言いたいんだな、って。私が、私が、そうだな、落ち着いて聞けるようになったかな。で、父にも自分のことが話せるようになったかな。あんまり、一緒

の場に居たくないと思ってたし、なんとなく緊張するから。で話すことも困るから。あんまり一緒に居たくないな、って、話したくないなって思ってたけど。いつまでもそうしてたら、いつまでも理解できないままだから。それはいけないな、と思って。それで、とりあえずは、いったんは聞くようになった。し、それに対して何か思えば言うようにしたけど、なるべく、怒鳴らない、というか声を荒げないように。言ってみようとしたかな。

F17 (28歳女性 大学進学を機に一人暮らしを経験)

「すごく落ち込んでたりしてた時に、家族がいれば、なんか話したりとかテレビ見てしゃべってたりしてるうちに、なんとなく整理が付くのに。」  
「なんか、いかに無意識に人に頼ってたかっていうことに、すごく実感したのね」

(中略)

「外に出て、あの一人それぞれ、あれかもしれないけど、私はどっちかっていうと、これも出てから思ったんだけど。家の、まあ、家の価値観っていうものがあるじゃない。それに、確かにこれはおかしいとか、親の言うことはちょっと、とかって思うことがあっても、基本的に、たぶんその箱の中で違和感を感じてなかったんだと思うの。だから、外に出たときに、全く違う考え、根本的に違う考えをしてる人たちに、いっぱいいるじゃない。(一人暮らし)してて、自分に不安を感じたんだと思うの。その自分の価値観に。当然と思って、考えもしなかったことが、違うんだっていわれたときに「え、そうなの」みたいな。」

(中略)

親を、今までは親は親だったのね。でも親は親なんだけど、すごく一人の人間として、頑張ってるんだな。なんか単純な言い方だけど、頑張ってるそれぞれにやってるんだなっていうのを、すごく思ったのは大学出て帰ってきたときだったと思うの。なんか、今まで、親って言うのは当然の存在で、いるのが当たり前で、なんか言ってみれば子どものために色々やってくれるのが当然で、みたいな無意識に思ってたんだらうけど。なんか親は親でやっぱり、それなりに、いろんなこと考えて、ずーっときて。そういう意味では同じ。外にいる他人と



同じように普通の人なんだなっていうのを。当たり前なんだけど。違う意味で見直したのがやっぱり、帰ってきたときかなあ。

(中略)

で、そういうので余計に(親に)聞きたくなつたんだと思う。だから、なんか同じように話してくれるんでも、とらえどころも違うし、「えっつ、じゃあ、それはこういうことなの」って、突っ込んで聞いてくっっていう

F52 (26歳女性 大学進学を機に一人暮らし 卒業後から現在まで実家で両親と3人暮らし)  
昔だったら親は親でしかない、っていうか。親としての存在がすごい、強かったって思うんですけど。今は、親ですけど…親というだけではなくて。それ以外の、その仕事仲間のなかの〇〇さん、みたいな。ねえ、あと、夫婦関係で言ったら、まあ、夫婦の仲の旦那さん、妻、みたいな。その親って言う肩書き以外のところが、感じますね。

…それは、親以外の肩書きを感じるようになったのは、なんでなんだろう…

なんでなんだろう。

…さっき、その学生の頃にも(親はF52さんに愚痴を)言ってたのかもしれないけど、それが気にならなかった。ああ愚痴言ってるなあ、と思いはじめたのは何があるのかな…

何がある。聞くようになったのかな、とは思いませんね。

…聞くようになったっていうのは、どんな感じ…自分が、その。前は、ふうんって言って、流して。聞いているような聞いてないような。だったんですけど。ああ、大変なんだなあって思って。うーん、何が大変なのかなあみたいな聞き方をするようになったかな。自分

…聞くようになったっていうのは、なんで?…あの一、あまり聞いても動揺しなくなった。から、じゃないかなと思います。

…動揺しないっていうのは?…

えーつとですね。うん。たぶん。前だと親が言うことを聞き入れるか反発するか、みたいな二次元じゃないですか。親との関係って。指示されて

…上から言われて…

言われて。それが、そうでもない。

…その二次元じゃないとこの軸がでてきたのは、

何があったから?…

うーん。なんだろう。

…何かこれ、っていうのではなくって。自然にそうなってる感じ?…

そうですね。気づいたら、そうだったっていうのが強いのは強いですね。考え方に、自分なりにひとつ軸をもって考えるところが、少しでてきたからかなって思って。振り回されないっていうか。言われても、まあ、こういうこともある、ま、置いとこ、みたいな。そういう考えもある、じゃ、ここに置いとこ、みたいな。うん、父親はこっちやね、母親はこっちやね、ちょっとずれてますよねえ。みたいな。私、この辺だもんなあ、ちょっと違うよみたいな。そういう見方をするようになった。

(中略)

例えば、ですね。父親の、仕事の話とかものすごくするんですよ。なんだか分かんないんですけど。ものすごく家庭に持ち込むんですね。仕事の話。こういうことがあって、こう言う人がこんなことを言って、自分はこんなことを言ったんだみたいな。ふうん、で?みたいな。話しをしてるんですけど。毎日のように。えーつと、たぶん昔は、えーつと父親は、そう言う話は母親にしかしてなかったと思うんですよ。でも、私にもするようになった

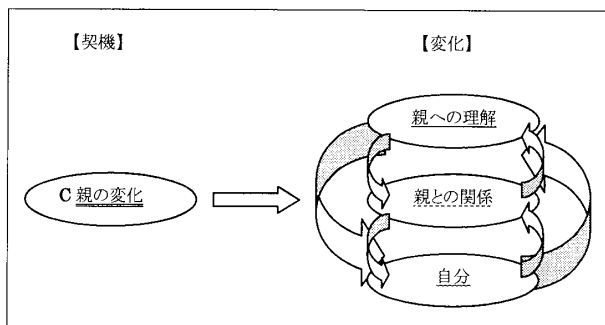
(中略)

…違うポジションが取れるようになるって、なんの力が一番大きかったのかな?…

(大学時代のサークル活動で)年間通して活動してっていうのがあって。(中略)で、そういうの全部ひっくるめて、一年の活動、自分がやってきたこと。っていうのを、うん、考える、まとめていくと、うん。具体的に何を軸にしていくっていう、そのひと言じゃなくって。もっと、具体的にこういうことしてない事、したなっていうのが、見えるようになってきたというか。その、自分がやってることと、そうじゃないものっていう比較ができるじゃないですか。これはしたけど、これはしてない、みたいな。で、こういうことはしたけど、これはできなかったとか。そこで、こうしておけばよかったとか色々思うところもあるんで。そういう比較する素材があるっていうのが、おっきいかなあって。

C. [親の変化] を契機とし、[親への理解] と [親との関係] と [自分] の変化を語る形式

親の老化や病気などの変化を契機として、その後には生じる3つの変化を語る形式である。[親の変化] として取り上げられる契機は、親の更年期や祖父母の介護などであり、その中でのある種の役割逆転の経験が語られるものである。また、変化として [親への理解]、[親との関係]、[自分] を同時に語るものである。



F8 (27歳女性 夫と二人暮らし 19歳で母親の突然死、その後祖母の介護・死を経験)

おばあちゃんの場合は徐々にこう悪くなっていく。なんだろう、こう、脆くなって行くっていうか、っていつてる。ああ、こうやって人は死んでいくっていうか。

(中略)

おばあちゃんが居なくなって寂しい、っていうのもあるんだけど、その後におじいちゃんとお父さんをみなくちゃいけない、っていうか。で、まあおじいちゃん、すごいわがままな人だったし、お父さんもほんとに、お母さんとおばあちゃんがいなくなるとなんにもできない、っていう人だったから。なんか、それで環境がぐるっと変わったっていうか。今までおばあちゃんに守られてたのが、急に守られるどころか、お父さんとおじいちゃんを

…世話をする方ですもんね。…

うーん。お父さんに言っても、お父さんもわけが分かんないし。なんか逆に逆ギレしたりして。お父さんだって分かんないよ、みたいな感じで。なんでお父さんなのに、みたいな。え、なんで出来ないんだろう、この人は、みたいな。で、なんだろう、こう、カルチャーショックっていうか、こう、あ大人でも、こう、なんだろう、悩んだりするんだなと思って。お父さんとかの世代になっても。ああこうやってパニックになるんだなあ、って

うので、また、こう変わったですね。もう、大人になったら、こういろんなことがこう、判断できて、こう

…冷静で…

冷静で、こう子どもとかに諭したりとか、なんかこう、子どもを守るために、自分がこう犠牲になるとか、そういうもんだらうってというのが、それが当たり前だらうと思ってたのが、ああこんなにもそんな完璧じゃないんだなあ、人は。っていう。うーん。やっぱ、その人のなんだろう、こう環境というかこう経験値で、やっぱ実年齢よりも経験値なんだなあっていうのを、そのうーん、実感したっていうか。

(中略)

親を守ってもらうものから自分が守っていかないといけないふうになって来たんだっていうのを、なんとなくその、その時に、うん。

(中略)

自分のことで、自分が、なんだろう、我慢したりとか、まあなんか動けばどうにかなるけど、人のことってどうにもできないじゃないですか。どう変えようと思っても、その人を。だからそれは、すごい、なんていうの。自分がどう動いたらこの人は変わるだろうとか、その時は、一生懸命考えたりとか、悩んだりとかして。そうだけど、人は変わんないっていうのは良く分かったんで。もう、あ、それはそれだな、その人はそういう生き方なんだっていうのは受け入れるっていうのが、だんだん時間とともに、できるようになってきたっていうか。距離、その人の距離が置き方。が…が、自分なりに持てるようになってきた…

その、何年間かの間に、その学んだ気が。…その学べる力っていうのはどこから出てきたんでしょう？…

えー、もうなんだろう、力。でも、うん、習うより慣れろっていうか、もうその間はお父さんとも喧嘩したし、もうもう、家出とかもしたし、なんか。色んな人に話とかしたり。うーん、でも人に、聞いてくれる人がいたから、友達とかおばとかお兄ちゃんとか。今の主人とか、こう話が出来たのが救いだったかな。うーん。だから、みんな違うんですよ、言うことが。みんな違うから、あみんな違うんだなと思って。なんか、こう、もう、だから最初は、例えば答えは1つだと思ってた、自分は絶対に。で私は間違っていないみたいな。なん

で、あんな人はあんなんだ、とか。なんかそういうこととか、自分がこうだめなのか、とか。こう、うーん、もうなんだろう、一かゼロかみたいなの、もうなんか感じだったんだけど。もう、こういうのもありだし、そうじゃないのも有だしていうのを、うーん。こう時間をかけてゆっくり。学んだ気がします。

(中略)

おばに振り回された時期もあったんですよ。うーん。だけど、そのおばもなんか病気になるって、なんだろう、今まで言っていた事と全然違うことを言い始めたんですよ。で、あ、あの、なんだろう、「あ」って。人はそんな、その私の中かで、そのおばはパーフェクトだったんだけど、最初は。ああ、この人もああ、そう完璧じゃないんだなあって思っていて、で、なんか。ああ、で私はこの人みたいに生きていけないし、この人の言う通りにもできない、っていうのも、を、ほんとにここ何年かで思えるようになった。それまでは、ほんと、あ、自分はなんてダメな子なんだろうとか、うーん思って。それをまたちがう友達に言ったりとか。うーん、こうしてて。で、うーん。でもなんか、うーん。でも、だんだんだんだん、なんかそういう状況がいろいろ変わってくる中で、みんな言うこと変わる。あの時、ああって言っていたのに、ああ今は全然。その、その言っていた人もいろいろあって言うこと変わるから。うん、答えは常に一定じゃないし、うーん、それで一定であらねばならないことに、こだわる必要もないんだなあっていうのを。前自分が一回言ったことを、曲げるといけないみたいなところがあって。なんか、あの一、うん。もう、言っちゃった、うん、やらなきゃ、みたいなのがあったんだけど。それで言っちゃって、自分がだんだん苦しくなっちゃって。どうしようみたいな、なっちゃったりとか。あったんだけど。うーん、そんな、いい加減でもいいんだな、っていうふうに思えるようになって。で、うーん、楽になった気が。

F52 (26歳女性 大学進学を機に一人暮らし 卒業後から現在まで実家で両親と3人暮らし)  
多分、抵抗があるっていうのも変化の途中なんだろうなと思うんですよ、で、小さい頃っていうのは親は何でもできる何でもしてくれるで

(中略)

で、うんそれ(親にもできないこと)はだんだん増えてきて。であと、自分のことをわかってくれるのが当たり前じゃなくて。解らなくても認めてくれるのが親っていうかんじなんだろうなと思って。でも分からない部分がある。

(中略)

姉よりも私のほうが解らないって言う、言い方をされて、ちょっと、それでショックだったんですよ。こんなに解りやすい人はいないぞと思いがら。でもやっぱり、親子であってもわからない、理解できない部分っていうのはあるって言うのを言われたって言うことが、なんか、人と人なんだなっていう感覚をすごいもって、でもどこか得意、そんなはずは無いっていう(笑)んー、その何でも解るのが親だと思っていた自分と、あつやっぱわからない部分もあるんだなって思う自分の葛藤みたいなのがあって、で、解らなくても親は、大事に、していかないかんのやなっという気持ちと、んーそう思っているのもなんか変な感じもするしとか、いろんな葛藤、ちょっとアンバランスでこれをしているのが普通だっていう感覚まではあんまり無いだからちょっと抵抗がある。んー抵抗。

(中略)

えー最近・戻ってきて、親と一緒に暮らすようになって1年2年目に入るんですけど、自分の生活の変化っていうよりも2・3日前だったかな・姉が出産をしたんですよ。父親も母親も初めてじいちゃんばあちゃんになった。っていうところでそのあ〜そういう歳なんだなっていうこと感じたのとあと、まあ、姉もそうですけど私ももう先どう生きていくかって言うのがある程度めどが立って、父親も母親ももうそろそろ仕事を引退して、家を引き払って二人暮らしを始めたいというような話が出てきて、あーそうなんだ。そういう歳なんだなっていうのをすごい感じて、こんどどうやって見ていくって大げさかもしれない…、って体は悪くないんですけど、どうやって支えていくか、あんまりちょっと、そんなに歳ではないんですけどね。ん〜でも、いつかは私が世話をして行かなきゃいけない人達なんだよねっていうのを最近、意識するようになった。ん〜それは、私は帰ってきてからが強いですよ。その空いてる4年間があって、その間の変化っていうところで、前だったら結構、

反応がぱっと返ってきたのにちょっと遅いような気がするとか・・・んーやたら、パソコンをこう使ってはいるけどうまく使えてない父親がいたりとかすると、あもうこうでしょとかいう教えてあげるその、それが嫌だとかではないんだけど、やっぱり、老いを感じる。ん～なんかそうゆうところでは、んーちょっとずつ。

(中略)

最近、すごく感じる、前はあの、面白い映画があったら友達を誘って観に行ってたんだけど、それに母親がなんかこれ面白そうよねっていったら、あー一緒に行ってあげようかなって思うようになった。

んーのが・・・

(中略)

・・・友達の質が変わった感じ。それはどういうこと？・・・  
こう、例えばですね。うんと、そうだなあ。友達でも、ちょっと買い物行ったり、ちょっと映画見たりって友達いるじゃないですか。でも、いつも会うわけじゃないけど、まあ会ったら、話しがはずんで、じゃあ、こんど映画でも見に行く？みたいな友達。が、以前の友達。

・・・以前のお母さんとの関係。・・・

関係。で、今は、うーん。そういう部分もあるけど、ちょっと気をつけてみておかないといけないなあっていうかんじ。

・・・どんなときにそれを感じる？・・・

最近ですね、ちょっと更年期に、みたいなんですよ

・・・どんなところが・・・

急に、何もなくなる。ものすごく、その、家の、家事をしてるときもあれば。急に、ぱっとなくなる、動かなくなる、眠いとかって言って。もういい、とか言って。もういい、の意味がわかんないんですよ。こっちは。あと、父親が何か買ってくるじゃないですか。気に食わないんですよ。

(中略)

・・・なんか、この間聞いた時は、ちょっと抵抗があるって。そんなこと言ってたけど・・・

最近、そのちょっと更年期の症状が強くなってきてるんですよね。うん、だから、わぁ大変って思って。私は、まだ今居る状態だったから良かったですけど。居ないときだったら、これはちょっとやばかったかなあ。と思うぐらいあるので。

(中略)

距離のとり方が難しい

・・・逆転？・・・

自分が上についている感じじゃなくて、別物になった感覚

(中略)

うーん、ちょっと縛られてる感じがあるというか

(中略)

今、その(母親の更年期の)真っ只中なので、そこで変わってるのが多いかな。考えざるを得ないというか

## 考 察

「自分についての語り」と「他者との関係の語り」が同時に語られる現象の整理を行ない、6つの概念を見出した。そして、この概念の引用の仕方(引用しない事も含めて)や組み合わせ方という「語りの形式」に注目したところ、3つの類型を見出した。しかし、本研究で行なった分析および結果は、現象の整理という点からは目的を達しているが、「自己概念の組織化」や「自己と他者の相補性」というリサーチクエスチョンについて十分な知見を得るには至っていないと考える。つまり、この点から理論的飽和には至っていないといえる。

そこで、理論的飽和を目指し今後の理論的サンプリングの方向性を検討するにあたって、以下の考察と議論とを行なう。まず、語りの形式とは自己概念における「自己と他者」の位置づけ方を反映していると考え、類型による違いを結果から直接的に導き出されるものについて考察する。そして次に、この考察から「自己と他者」の問題についての議論を行なう。つまり、どのように「自己と他者」は組織化しているのか、どのように「自己と他者」の相補性は成り立っているのか、について論じる。この考察と議論を行ない、今後の理論的サンプリングの方向性を見出したい。

### 各類型についての考察

#### A. [自分のライフイベント経験]を契機とし、[親への理解]の変化を語る形式

##### 「自己と他者」の位置づけ

この類型では、「自分について」と「親との関係について」を同時に語る場合に、契機として用いられるのは[自分のライフイベント経験]であり、変化として語られるのは[親への理解]である。

しかし、この類型にあてはまる協力者の「自分について」語った部分を逐語録から取り上げてみると、

[自分の変化]が多く語られ、「自分と親との関係」を同時に語る部分は少ない。F4とF5の両者とも、坂上(2004)研究では「揺れ⇒変化」、坂上・園田・津田(投稿中)研究では【以前とは変わった】に類型される語りである。

それでは、なぜ自分の変化を多く語る協力者であるにも関わらず、「自己と他者」とを同時に語る場合に、契機として用いられるのは[自分の変化]ではなく[自分のライフイベント経験]なのであろうか。[自分の変化]と[自分の経験したライフイベント]のどちらも「自己」とするならば、この類型においては「自己と他者」とを同時に語る場合において「自己」とされるのは[自分の経験したライフイベント]なのである。このことは、自己と他者とが語り手にとってどのように位置づいているのかの一側面を表すものであると考える。

#### 「自己と他者」の問題

以上のことから、「自己と他者」の組織化・相補性について、何が示唆されるであろうか。この形式の語りからは、「自己と他者」とが相補的にはとらえられておらず、あくまでも「自己と他者」とは時系列的に並べられたに過ぎないことが示唆されよう。

それは、自己が先行しそして他者との関係をとらえるという時系列的な位置づけが見出せるものであり、「自己から他者を組織化する」という方向性での位置づけについても、「他者から自己を組織化する」という方向性での位置づけのどちらも見出せなかった。もちろん、「自己と他者の相補性」についても見出せないものであった。

#### 今後の理論的サンプリング

F4とF5の語りは、「自分の変化について」語るよう求めたものであり、「親との関係」を直接に語るよう求めたものではない。そのため、面接のリサーチクエストによって規定された語りの形式であるとも考えられる。そこで、今後は「親との関係」を直接に語るよう求めた場合にも、この形式が見出されるのかどうかについて更なる理論的サンプリングが求められる。

この「自己と他者」とを相補的にとらえることのない、時系列的な位置づけの語りという現象を取り上げたのは、本研究が「自己と他者」の組織化と相補性を明らかにすることを目指しており、リサーチクエストの典型とともに、それとは対照的なものについても明らかにすることで現象への理解を深める目的からであった。この点からも、この形式についての理論的サ

ンプリングと分析とを継続して行なう。

#### B. [自分の変化]を契機とし、[親への理解]と[親との関係]の変化を語る形式

##### 「自己と他者」の位置づけ

この類型では、[自分の変化]を契機として[親への理解]と[親との関係]の変化が語られる、という位置づけが見出された。

##### 「自己と他者」の問題

以上のことから、この類型から「自己と他者」の組織化・相補性について、何が示唆されるであろうか。この形式の語りからは、「自己から他者(他者との関係)へ」という組織化のあり方が示唆されるのではない。ただし、他者および他者との関係から自己への方向性での組織化は示唆されなかった。この類型においては「自己と他者」について一方向的な組織化は見出されたものの、「自己と他者」とが互いに自己を作っていくという相補性については示唆できなかったといえる。

#### 今後の理論的サンプリング

この類型においてみられる契機に「自己」を位置づけ、「他者」を位置づけないという語りの形式は、面接の構造による違いを反映しているのか、それとも、語り手が持っている「自分のとらえ方」の違いを反映したものなのか、今後の理論的サンプリングによって分析していくべき点と考える。例えば、F5とF17の協力者については「自分の変化」のみを面接で尋ねているが、F52の協力者についてはまず「親との関係変化」を尋ねた後に「自分の変化」を合わせて尋ねている。つまり、尋ね方が違っていても現象としては共通のものが抽出できているのである。このことは、面接の構造の違いというよりも語り手自身の持つ語りの形式、つまり「他者との関係のなかでの自分のとらえ方」の違いが見出されたことを示唆していると考えられる。

今後は、「親との関係変化」も合わせた面接を重ね「自己から他者へ」の方向性の組織化について更に検討を重ねることとする。そして、合わせて「他者から自己へ」の方向性の組織化についても見出すことも目指す。

また、「他者」のみを取り上げて形式を検討すると、[親への理解]と[親との関係]の二つの概念間の関係については十分なものを示す事ができなかったと考える。F5とF17の語りについては、[親への理解]が変化したことで親との実際のやり取り([親との関係])が変化したという時系列的な方向性が見出せるものの、

F52の語りについては「親への理解」と「親との関係」の二つの概念は同時進行的に語られている。「自分の変化」から「親への理解」が生じ、「親との関係」も実際のやりとりレベルで変化するという3つの概念の時系列的な流れが見出せるのか、それとも、「自分の変化」が契機とされ、その後の「親への理解」と「親との関係」のふたつの変化は同時に生じるものなのかを検討する必要がある。

### C. 「親の変化」を契機とし、「親への理解」と「親との関係」と「自分」の変化を語る形式

#### 「自己と他者」の位置づけ

この類型では、契機に「親の変化」を語り、変化として3つの概念が同時に語られる。そして、変化として語られるものは「自己と他者」とが同時に位置づけられているのである。この位置づけ方は、単に同じ時系に並べられているというよりも、むしろ「親への理解」, 「親との関係」, 「自分」の変化を行きつ戻りつしながら、照らし合わせながらというあり方が垣間見える。つまり、「自己と他者」とが相互に位置づけられているのである。

#### 「自己と他者」の問題

これらのことから、「自己と他者」とが相互に組織化するという「自己と他者」の相補性が語りに顕著に現れている語りの形式であることが示唆される。「自己から他者へ」そして「他者から自己へ」というように、相互に循環しながら語られる形式であり、本研究のリサーチクエスションとして目指したものと合致するものであった。

#### 今後の理論的サンプリング

しかしながら、この語りの形式は全ての協力者に見出されるものではない。本研究の方法「2. 分析対象とした協力者」で説明を加えたように、坂上(2000)研究の協力者20名と追加協力者6名のうちこの語りの形式に当てはまる語りは2名に限られる。「自己と他者」の組織化・相補性をリサーチクエスションとして研究を進めるにあたって、本研究では他者として親を設定した。しかし、多くの協力者が親との関係のなかで自己を照らし合わせながら語ることがないという現象から本研究の方法としての問題点が浮き彫りになる。その問題点とは、他者として親を設定することが良いのかどうかである。つまり、語り手にとって他者とは親に限らず多くの他者との経験をしているはずである。そこで、他の他者との関係を含め語り手本人にとっての重要な他者を設定し、調査面接を行なう必要がある

と考えている。具体的には、「あなたが大切な人との関係・関わりのなかで、自分自身を強く意識するようになった出来事についてお話をください」という問いかけや「あなたにとって大切な人との関わりの中で、自分を考えたり意識したりという経験についてお話をください」という問いかけなど、面接設定の工夫が考えられる。

#### 全体的考察

本研究では、「自己と他者」のとらえ方がどのように自己概念を形成しているのかについて、語りの形式から論じた。本研究が示唆した3つの形式にみられる「自己と他者」について、先行研究で理論的に示されている概念や理論から更に考察を加える。

まず、「自己から他者」の時系列的な位置づけについては、「自己と他者とをどうとらえているか」という自己概念が直接に表れたものというよりも、むしろ物語の構造そのものが強く表れているのではないかと考えられる。Gergen(1994/2004)が、「『自己についての語り』という語は、自己に関連する時系列的な事象間の関係についての個人の説明を指す」として、「事象を時間軸に沿って単線的に並べる」形式が多く用いられていることを説明している。また、やまだ(2000)は連続する時間のなかで、何かを「始まり」としその後の出来事とむすびつける認識が物語の形式のなかに存在することを指摘している。「自分についての語り」とは、単なる語りの形式に過ぎないのか、それとも自己概念を反映したものなのかについて今後も更なる検討を行いたい。

次に、「自己から他者へ」という組織化については、自己(もしくは自己の変化)を同定することで他者を見出すという語りであった。これは、榎本(1987)が示す「他者から自己へ」の組織化や意識の指摘や社会学的な自己論(浅野, 2001)の前提とは逆の方向性であった。つまり、他者を同定することで自己を見出すという組織化は本研究では見出せなかった。「他者との関係のなかで自分をとらえる」際に自己の同定が先行するという現象は、発達の側面から考えるならば本研究の協力者が20代後半という年代に特有なものであるとも考えられる。40・50代を対象に語りの分析を行った坂上ら(2006)の研究では、主に「親との関係についての語り」が中心であり、「自分について」はほとんど語られる事がなかった。「他者との関係のなかで自分をとらえる」ということが、自己が先行するのか、あるいは他者が先行するのかについて発達のな

変化があるのかどうかについて、今後更に検討を行いたい。

最後に、「自己と他者」の相補性に関して Mead (1934/1973) は、「『I』とは、他者の態度にたいする生物体の反応であり、『me』とは、他者の態度（と生物体自身が想定しているもの）の組織化されたセットである。他者の態度が組織化された『me』を構成し、人はその『me』にたいして『I』として感応する。（翻訳 p.187）」というある種の循環を指摘している。この点については、本研究が明らかにした語りの形式 C において自己と他者とが相互に自己を組織化していく様相が語りに見出されたと考える。しかし、この「自己と他者」の相補性は全ての語りにみられるのではない。このことはどのような意味があるのだろうか。「他者との関係のなかで自己を語る」現象についてのひとつの説明の可能性として、自己をメタ的視点でとらえているかどうかということが関わっていると考えられる。この点についても、今後更に検討を行いたい。

#### 引用文献

- 浅野智彦. (2001). 自己への物語論的接近: 家族療法から社会学へ. 東京: 勁草書房.
- Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. (1991). Attachment style among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1976). 母子関係の理論 I: 愛着 (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子, 訳). 東京: 岩崎学術出版社. (Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss, Vol.1 Attachment*. London: The Hogarth Press.)
- Bowlby, J. (1977). 母子関係の理論 II: 分離不安 (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子, 訳). 東京: 岩崎学術出版社. (Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol.2 Separation: Anxiety and Anger*. London: The Hogarth Press.)
- 榎本博明. (1987). 自己解放性と適応—仮面と自己をめぐる—. 島田一男 (監修), 講座: 人間関係の心理 第6巻 性格と人間関係 (pp.89-121). 東京: ブレーン出版.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門: <人間の科学>のための方法論. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg.)
- Gergen, K.J. (2004). 社会構成主義の理論と実践: 関係性が現実をつくる. (永田素彦・深尾誠, 訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K.J. (1994). *Realities and Relationships: Soundings in social construction*. Cambridge: Harvard University Press.)
- Gergen, K.J., & Gergen, M.M. (1988). Narrative and the self as relationship. *Advances experimental social psychology*, 21, 17-56.
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1996). データ対話型理論の発見: 調査からいかに理論をうみだすか. (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategy for qualitative research*. New York: Aldine Publishing Company.)
- 原田杏子. (2003). 人はどのように他者の悩みをきくのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成—. *教育心理学研究*, 51, 54-64.
- 磯村陸子. (2004). ピアカンファレンスを活用する: 質的研究を育て、学ぶ場. 無藤隆・やまだようこ・南博文・サトウタツヤ (編), 質的心理学 (pp.199-204). 東京: 新曜社.
- Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Mead, G.H. (1973). 精神・自我・社会 (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収, 訳). 東京: 青木書店. (Mead, G.H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- 箕浦康子. (1999). フィールドワークの技法と実際: マイクロエスノグラフィー入門. 京都: ミネルヴァ書房.
- 能智正博. (2000). 頭部外傷者の<物語>/頭部外傷者という<物語>. やまだようこ (編著), 人生を物語る: 生成のライフストーリー (pp.185-214). 京都: ミネルヴァ書房.
- 能智正博. (2003). 質的研究におけるグラウンデッドセオリー法の位置づけ. *人間性心理学研究*, 21, 299-325.

- 能智正博. (2004). 理論的サンプリング：質的研究ではデータをどのように選択するのか. 無藤隆・やまだようこ・南博文・サトウタツヤ (編), 質的心理学 (pp.78-83). 東京：新曜社.
- 中村佳奈. (2006). 健康型高齢者住宅入居者の生活満足度と人間関係. 久留米大学大学院2005年度修士論文, 未公刊.
- 岡島藤香. (2006). ひとほどどのように“多発性硬化症と共にある”という体験をしているのか—神経難病患者の語りの質的研究—. 久留米大学大学院2005年度修士論文, 未公刊.
- 坂上ちおり. (2004). 人は自分をどのようにとらえているのか—揺れを一指標とした語りの分析の試み—. 白百合女子大学大学院2003年度修士論文, 未公刊.
- 坂上ちおり・園田直子・津田 彰. (2006). 語りから検討する40・50代の「親との関係」のとらえ方・意味づけ. 久留米大学心理学研究, 5, 41-54.
- 坂上ちおり・園田直子・津田 彰. (投稿中). 成人前期の人は自分をどのようにとらえているのか—語りの類型化と「自分のとらえ方」の検討—. 質的心理学研究
- やまだようこ. (1986). モデル構成を目指す現場 (フィールド) 心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ. (1997). (編), 現場 (フィールド) 心理学の発想 (pp.161-186). 東京：新曜社.)
- やまだようこ. (編著). (2000). 人生を物語る：生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.

## A narrative analysis of self and others for early adulthood

CHIORI SAKAUE (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

NAOKO SONODA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

AKIRA TSUDA (*Faculty of Literature, Kurume University*)

### Abstract

This study examined how people narrate self and others. The purpose of this study is to investigate the types of narratives about “self and others” and to get suggestion of discussion about “self and others”. Narratives about self and relationship of parents were obtained through in-depth interviews with 5 women (age 26-28). Through qualitative analysis, we have 2 category of **[a beginning]** and **[change]**. **[a beginning]** is 3 concepts of [experiences of one's life events], [changing my self], [changing of parents], and **[change]** is 3 concepts of [understanding about parents], [relationship of me and parents], [self]. We examine the patterns of using 6 concepts, we get 3 types of narrative form. A is using [experiences of one's life events] for **[a beginning]** and using [understanding about parents] for **[change]**. B is using [changing my self] for **[a beginning]** and using [understanding about parents] and [relationship of me and parents] for **[change]**. C is using [changing of parents] for **[a beginning]** and using [understanding about parents] and [relationship of me and parents] and [self] for **[change]**. These results suggest that place the tense of “self and others”, organization of “self to others”, and organization of “self and others mutually”.

**Key words:** self and others, narrative, types of narrative, organization, mutually